

交通安全管理における文化的多様性の役割

レイモンド フランクリン ソームズ ジョブ
世界銀行、GRSF・GLRS局長

根木 和幸
世界銀行、GRSF・GLRS
ジュニア・プロフェッショナル・オフィサー

主に道路利用者の行動に見られる文化的特徴に注目し、交通安全実績における文化的な決定要因について広範囲にわたり有益な研究を行っている機関があります。本発表は、あまり考慮されないことのない文化的要因について調査・研究したものです。文化的要因は、道路利用者の行動だけでなく交通安全管理にも影響を及ぼします。文化と交通安全管理については、さまざまなケースがあります。

(i) 文化的背景から生じる運動、法律、法規、取締り。たとえば、アメリカ大陸の多くの国では、憲法の一部として特定の権利を明確に示す点において米国をモデルとしています。このため、他の国では法的に可能で強力な抑止力として効果的なアルコールやドラッグの抜き打ち呼気検査を行うことができない場合があります。

(ii) 特定の思考様式や文化は、厳密な科学的根拠に基づくアプローチを取りやすくします。より強固な交通安全管理を行うにはこのようなアプローチが役立つのですが、科学的根拠ではなく常識的な意思決定により、このアプローチが制約されてしまうことも多々あります。そのような場合、管理政策の選択、並びに測定可能な指標に基づく実証実験などの実施の優先度や迅速性が変わってしまう可能性もあります。

(iii) 文化的価値は、交通安全に対する投資額、および死亡事故や重傷事故は許されるものではないという倫理規範に基づいた交通安全システムのアプローチの導入に影響を与えます。たとえば、国の法律で制限速度が定められていない多くの発展途上国では、犠牲者の側が非難されるというような交通安全へのアプローチが依然として広く採用されています。

GRSFは、問題点と改善点をより深く理解するために様々な傾向に注目して、交通安全管理における国や地域の違いを調査してきました。同等の所得レベルであっても、国によって交通安全管理の問題点が異なるように見えることから、多様な例を詳しく調査することは違いを理解する上で価値があるといえます。